



あつひろ
大川 敦弘 さん

●犬伏小学校 6年

夢をかなえるサッカー選手に

ぼくは、プロになるためにサッカーをやっています。気が付くと、ぼくは何よりもサッカーが好きになっていました。テレビであこがれの選手のプレーを見るたびに、ぼくも世界で活やくする選手になりたいと思います。

そのために、今、勉強も運動もがんばっています。もっと上を目指していきたいです。そしていつか、あのテレビの向こうのグラウンドで夢をかなえるプレーができる選手になり、みんなにサッカーの楽しさを教えてあげたいです。



佐野ブランドキャラクター
さのまる

**市長からの
メッセージ**



通学する生徒の服装も軽くなり、衣替えの季節となりました。先月から今月にかけて、各種団体などの総会や催しなどが数多く開催され、私も時間の許す限り出席させていただいております。会場で多くの方と接することで、幅広いご意見を市政運営に取り入れていきたいと考えております。

さて、先月、本市のブランドキャラクター「さのまる」による経済波及効果の試算を発表しました。さのまる誕生から昨年の10月までの3年9月で、なんと59.2億円という数字であり、これほどの効果額に驚いております。また、マスコミを通じた広告効果も35億円であり、さのまるが日本一に輝いたことにより、本市の知名度の向上、並びに市民の地元愛の醸成といった目に見えない効果も大きいと感じております。この結果を踏まえて、今後さのまるを先頭に本市の魅力を発信してまいります。

5月には「佐野ふるさと特使」である歌舞伎俳優の中村鷹之資たかのすけさんから招待を受け、歌舞伎座5月公演に出演する鷹之資さんを表敬訪問してまいりました。中村鷹之資さんはこの4月に特使に任命した高校生でございますが、梨園の大御所と一緒に堂々とした演技を披露してまいりました。

5月1日には県立・佐野高校出身で、ラグビーの日本選手権優勝チーム「ヤマハ発動機ジュビロ」で主将として活躍する、三村勇飛丸ゆうひまるさんを「佐野ふるさと特使」に新たに任命いたしました。勇飛丸さん、そして鷹之資さんと若いふるさと特使の今後の活躍に大いに期待しております。

今年5日には、文化会館でブルガリアから世界的にも有名なソフィア少年合唱団の佐野公演が行われます。日本での公演は20年ぶり2回目であり、県内初の公演です。美しい本物の歌声を聴いて、梅雨空でもさわやかな気持ちで過ごしたいですね。

岡部 正英



今回の表紙 「くずうフェスタ2015の花火」 5月9日撮影

5月9日、くずうフェスタ2015（葛生産業協会主催）が開催され、葛の里壱番館周辺などで昼の部が、葛生あくとプラザ北側で夜の部の花火大会が行われました。

花火大会では、開始直前に雨が落ちてきてしまいましたが、夜空を彩る約1万発の花火を多くの方が見上げていました。

ゆうひまる
三村 勇飛丸さん
(ヤマハ発動機ジュビロ)



○プロフィール

足利市出身。県立佐野高等学校でラグビーを始め、明治大学を経て、2011年ヤマハ発動機に入社。2013年から主将を務める。ひたむきに体を張るフランカーとして活躍中。平成27年5月「佐野ふるさと特使」に就任。



佐野市で始めたラグビー

市ではこの5月から、ラグビー・ヤマハ発動機ジュビロに所属する三村勇飛丸さんを、「佐野の魅力・よさ・実力」などを市の内外に発信する「佐野ふるさと特使」として委嘱しました。

三村さんは2014年・15年シーズンのラグビートップリーグにおいて第2位、2015年の日本選手権において初優勝を果たしたチームの主将を務めており、体を張るプレーでチームをけん引しています。

三村さんは、足利市出身ではありませんが、県立佐野高等学校でラグビーに出会い、今日に至りました。特使の委嘱に際しては「ラグビーを始めた佐野市に恩返しする機会を得られてうれしく思っています。ラグビーで活躍することを通して、佐野市に貢献していきたいと思っています」と話してくださいました。

中学までやっていたスポーツは野球。ラグビーを始めたのも友人の誘いがきっかけだったそうですが、高校3年時には主将を務めました。県大会の決勝では惜しくも破れ、全国出場は果たせませんでした。当時の恩師は「入部当時から足腰がしつ



2015年の日本選手権決勝でプレーする三村さん(中央)

かりしていました。主将の3年時には、チームを自然に引っ張ってくれ頼もしい存在でした」と話します。ヤマハ発動機ジュビロは早稲田大学などで監督を務めた名将・清宮さんが監督を務め、日本代表キャップを持つベテラン選手が複数所属する名門チーム。三村さんは2011年に入社し、入社3年目の2013年から主将を務め、今年で主将3年目になります。

今シーズンの目標は「トップリーグ優勝・日本選手権連覇」と話す三村さん。やさしい表情の中から、強いまなざしでその目標を話していました。佐野市から生まれたラグーマン・三村さんをぜひ応援してください！

佐野弁
ばんざい

フットケルは火をつけること

風呂を沸かす燃料は、一般的にガスや灯油ですが、かつては雑木・檜・杉などを切り割ったまきが主なものでした。かつて風呂は桶の形をし下部にはかまどがあり、これを方言でセーフロといっていました。セーフロの焚き口にたきぎを入れて湯を沸かしました。たきぎはモシキまたはマキダツポーなどといいます。これに火をつけることをフットケルとかヒーフットケルなどいいます。

「セーフロにヒーフットケタ(火をつけた)か。フットケルなら、さわにマキダツポーをツツケベルンダカンネ(くべるんだよ)」

ヒーは「火」の意、フットケルは「吹き焚く」の変化語。火吹き竹から息を強く吹き出して発火させることから、フットケルという方言が生まれました。フットケルに対して、「火がつく」ことをフットカルといいます。

「なかなかフットカナンカッタ(燃えつかなかった)けど、フキダケ(火吹き竹)でプーブー吹いてたら、ヤットコストコ(ようやく)フットカッタよ」

昭和25年頃まで、鍋や鉄瓶などは、いろりにつるしてあるカギツツルシ(自在鉤)にかけて湯を沸かしました。燃料はすべてモシキでした。火を焚いて煮炊きするカマクド(かまど)もセーフロも、今ではすっかり姿を消してしまいました。同じくフットケルとかフキダケという語も、あまり聞かれなくなってしまいました。

(市民記者 森下喜一)

